

實學概念について

小川 晴久

一
十八世紀を頂點とする十七世紀後半から十九世紀前半までの約二世紀間の、自國の歴史と時代思潮をどのようなものとしてとらえるかは、東アジア三國のそれぞれにとって切實な課題であつて、それ自體が貴重な學問史を形成している。とくに一九三〇年代に中國で、朝鮮で、日本で、若き知識人たちが自國の近世史の中に近代と現代につながる自生的な最良の精神的遺産¹⁾立脚地を確認すべく、この時期の把握に向つた營みがある。今日我々が同じような欲求をもつてこの時期の遺産に向うとき、一九三〇年代の先人たちの營みが改めて注目され、甦る。今の私にとくに参考になるそれは、この時期の思潮を「啓蒙主義思想」ととらえた中國の侯外廬の仕事、「實學(思想)」²⁾ととらえた朝鮮の文一平、鄭寅普らの仕事である。

私自身はいえ、この十數年來十七・八世紀の東アジア三國の自然科學に強い哲學者たちに關心を向け、彼らを東アジアのアンシクロペディストたちととらえてきた。この時期の全體の思潮をとらえようという關心よりは自然科學者でもあり哲學者でもあつたという數少ない學者たちに熱い目を注いできた。中國では十七世紀の方以智や王船

山、十八世紀の戴東原、朝鮮では十七世紀の金錫文や十八世紀の洪大容、日本では十八世紀の三浦梅園らである。アンシクロペディストというとき十八世紀のフランスの思想的巨人ドニ・ディドロが念頭にあるのはいうまでもない。これらの自然科學の研究で立派な仕事をした哲學者たちを一括する呼稱としてはアンシクロペディスト(百科全書派)が一番ふさわしいと考へるが、いつの頃からか私は同時に「實學思想家」という呼稱をも併用するようになった。それはこのうちの一人洪大容が十八世紀の實學の全盛期を代表する學者の一人として南北朝鮮で理解されている影響を受けたからである。實學思想家という呼稱を使うようになってからも私の關心は自然科學に強かつた哲學者たちに限られていたので、實學概念そのものに關心を向けることはなかつた。便利な呼稱以上には出なかつた。しかし使う以上は一定のイメージがなくてはならない。幸い韓國における實學研究のリーダーであり、實學概念の規定でも指導的な役割を果してこられた千寛宇氏の論文集の一つが『韓國史への新視點』と題して邦譯されている。千氏には實學規定の代表的論文が二つあるが、今から二十五年以上も前に發表された「朝鮮後期實學の概念」という論稿³⁾で次のような規定がなされていた。

實學という新思潮の共通基盤として

一、奔放な知識を驅使して批判し、獨創し、權威を否定する「自由性」

二、經驗的、實證的、歸納的な態度すなわち「科學性」

三、實際と遊離したあらゆる空疎な觀念の遊戲を輕蔑し、現實生活からにじみ出る不滿と情熱を土臺にする「現實性」

の三つがみられる、と。

一九七〇年に世に出た第二論文は、朝鮮後期實學を改新儒學ととらえ、それを「近代志向の意識」進歩の意識」と「民族意識」自主の意識」の「複合的な一體」と規定した。

このような特徴付けで實學概念をイメージしつつも私自身の實學概念規定にまでは至らなかった。

ところが三年前韓國に洪大容研究のために一年間留學し、延世大學の閔泳珪教授を介して鄭寅普という學者とその主著『陽明學演論』を知るに至って私は始めて實學概念に目を開かれることになった。

閔教授の師に當る鄭寅普という學者は以下のように生きた人であった。一八九二年に漢城いまのソウルに生まれ、十八歳のとき一九一〇年（日本による韓國併合＝日本の朝鮮支配）を迎える。一九一一年に中國に遊學、その地で東洋學を専攻。同時に同志たちと祖國光復運動を始める。一九一八年（二十六歳）に歸國し、延禧專門學校（今日の延世大學）や梨花女專（今日の梨花女子大學）で教鞭をとり、また東亞日報等の論說委員をつとめる。解放後は國學大學を創設して總長に、また最初の政府の初代監察委員長になるが、一九五〇年朝鮮戰爭勃發直後の七月に北に拉致され、同年空襲により平安北道の熙川で爆死したという。五十八歳の生涯であった。

彼の代表作『陽明學演論』で私に開眼のきっかけをつくってくれたのは次の二點だった。

一つは李朝以降の自國の數百年の學問史を假行と虛學の歴史であったとするその總括。

朝鮮數百年の學問はひとえに儒學であり、それはひとえに程朱學であり、その程朱學も程朱の學說を自家の便宜のためにのみ利用する私營派と、程朱の學說を學んで中華の嫡傳を自國に残そうとする尊華派のみで、すべて「實心」から離れた「自私念」＝自利私利の心に根ざす虛學であったという嚴しい批判であった。この文が書かれた一九三〇年という年を想起されたい。朝鮮が國を奪われてしまったのも歴代の學問が實心にもとづく實學でなかったからだといふのである。實學を、實心に根ざす學問で、しかもこのように責任を問う根據となる學問として使われていることに私は衝撃を受けた。もっともイデオロギイ闘争では眞理意識にもとづいて相手を虚偽ときめつけるのが本質であるから、このような實學意識は別に新しいものではないともいえよう。ただそれまで實學を自然科學と哲學の結合というイメージでとらえていた私には、實心に根ざす學問、しかもそれが一九三〇年代に朝鮮の學者によって主張されていた點が新鮮であった。

しかしこの三年前の時點では鄭寅普氏のいふ實心のいみがまだよくわからなかった。

ところが第二の點、洪大容は陽明學派の一人であったという指摘は、それまで洪大容と陽明學を關係づけて考えたことがなかっただけに強烈な印象を残した。洪大容は鄭寅普氏のいふ實心に根ざす實學をしたといふのである。ここに至って洪大容の實學觀の検討を迫られることになった。

私にとって洪大容とは東アジア世界で科学的な天文觀の裏付けをもつて宇宙無限論をはじめて展開した人物、宇宙無限論の持ち主であつた。⁽⁷⁾長い間彼は朝鮮ではじめて地球自轉を唱へた地轉説論者として知られてきたが、今から八年前前に前述の閔教授によつて、最初の地轉説論者は洪大容よりも半世紀早い金錫文であることが解明され、⁽⁸⁾今韓國ではこの説が定説となりつつある。私は洪大容の宇宙理解の中に宇宙無限の視野が切り拓かれてることに氣づき、専らそれに魅せられていたので自説を修正する必要はなかつたが、洪大容は單は天文學者に止まらず數學者でもあり、また琴の名手でもあつて大變魅力的な人物である。しかし鄭寅普氏の指摘を受けて洪大容の著作をよみ返すと次のような文章が目に入ってくる。

曰此等人(李之菡^{一五七}・趙憲^{一五四}・引用者注)成就如此、皆以其實心實學也。苟不實踐而徒務空言則當時無所成其業。後世無所垂其名、非所謂學也。〔湛軒書、桂坊日記〕

ここには鄭寅普氏が使つていた實心にもとづく實學ということばがそのままある。實踐を伴わない空言に務めるのみの學に對して實心實學が對置されている。次の文章では實心實學の内容がもっとよく説明されている。

人生窮達、自有定命、兼善獨善、隨處盡分。吾儒實學、自來如此。若必開門授徒、排闥異己、陰逞勝心、傲然有惟我獨存之意者、近世道學矩度、誠甚可厭。惟其實心實事日踏實地、先有此眞實本領、然後凡主敬致知修己治人之術、方有措置而不歸於虛影。〔同、杭傳尺牘、答朱朗齋文叢書〕

實心實事日々に實地を踏む。先ずこの眞實の本領もちまへがあつて儒教のいう君子の學が確かなものになるといふ指摘。この文章でい

實學概念について

ま一つ見逃せないのは、己れと異なる者を排除し、權力をかさにきた傲慢な獨存意識の持ち主朱子學者に對する嫌惡の情である。

いま一つ洪大容による實學の規定がある。

天下之英才不爲少矣。惟科宦以枯之、物慾以蔽之、宴安而毒之、由是而能脫然從事於古學者鮮矣。詞章以靡之、記誦以夸之、訓詁以拘之、由是而能闡然用力於實學者鮮矣。功利以獲其術、老佛以淫其心、陸王以亂其眞、由是而能卓然壁立於正學者尤鮮矣。〔同、同、與鐵橋書〕

實學は、華やかな詞章、これみよがしの記誦、自己目的化した訓詁の學に對置され、陽の當らないところで實際の役に立つ、實のある學問として用いられている。

以上のような實心實學はかえりみれば中國の古代からその形がすでに出ていたことに氣づく。

德惟善政。政在養民。水火金木土穀惟修。正德、利用、厚生、惟和。

〔書經〕大禹謨

實學者たちが常にたち歸るところは書經大禹謨の六府・三事である。ここにある正德・利用・厚生の三事の關係が、正德もて利用・厚生を期すという實心―實學の關係である。利用・厚生をはかるとき、正德が出發點にある。

朱子にあつても定志と實行からなりたつ實學というもの形がきれいにとらえられている。

有定志。而無奔競之風、有實行。而無空言之弊、有實學。而無不可用之材矣。〔朱子文集〕卷六九、學校實學私議

それが陸象山やとくに王陽明になると實心の中身が「功利なきの心」としてより鮮明になり、ここに最大限の力點がおかれる。

古人自得之。故有其實。言理則是實理。言事則實事。德則實德。行則實行。『陸象山全集』卷一、與曾宅之

然必一意實學。不事空言。然後可以謂之講明。若謂口耳之學爲講明。

則又非聖人之徒矣。〔同、卷十二、與趙詠道〕

使在我果無功利之心、雖錢穀兵甲搬柴運水、何往而非實學。何事而非天理。況子史詩文之類乎。使在我尙存功利之心、則雖日談道德仁義、亦只是功利之事。『王陽明全集』、書牘卷一、與陸元靜

このような系譜をたどると、洪大容の實學觀も儒者の傳統的な君子の學の觀念の枠の中にあるもので、別に殊更新しいものでもないといえそうである。朱子も實學をいつているが、洪大容のそれは實心を強調した陸王の實學觀の系統と言えようか。そのいみで鄭寅普氏が彼を陽明學派としたのは根據のあることであつた。

しかし洪大容の實學觀を用語の上だけでなくその中身にまでたち入つて吟味してみよう。

二

洪大容の實學の中身を調べてみると「虚」との嚴しい對決と「六藝」の學重視の二つの特徴が浮び上つてくる。

まず第一の面。

彼の代表作に鑿山問答という作品があるが、これは文字通り實翁と虚子との對決という構圖になっている。注目されるのは虚子は儒者としてこれ以上の學識はないと思われる程の大學者として設定されていることである。虚子は朝鮮の儒者の代表であつた。

虚子曰少讀聖賢之書、長習詩禮之業、探陰陽之變、測人物之理、存心以忠敬、作事以誠敏、經濟本於周官、出處擬於伊呂、傍及藝術星

曆兵器邊豆數律、博學無方、其歸則會通於六經、折衷於程朱、此虚子之學也。『湛軒書』鑿山問答

實翁は中國人であつたかといえ、これは單純ではない。先ず實翁は洪大容本人の投影であつた。天圓地方説をとる虚子に對し、實翁は大地は圓いこと、地球體を教え、それが砲丸よりはやく速さで一日に一回轉していることを説く。そして前述したように宇宙無限までも。

またこの作品の大尾は華夷觀念の批判、中華意識の否定で終つてゐる。

また鑿山という作品の舞臺になつた山は今日の瀋陽の西側、遼河に沿つたところにある鑿丕閭山のことで、「夷夏之交」にある「東北之名嶽」であると作品冒頭で性格付けられている。古代高句麗の版圖が遼河以西つまり遼西にまで及んでいたことを想起するとき、實翁を鑿山の山中に住ませた洪大容の意圖は意味深長である。

それはともかく次の實翁の虚子批判を見よ。

實翁昂然而笑曰吾固知爾有道德之惑。嗚呼哀哉、道術之亡久矣。孔子之喪、諸子亂之。朱門之末、諸儒汨之。崇其業而忘其眞。習其言而失其意。正學之扶、實由矜心。邪說之斥、實由勝心。救世之仁、實由權心。保身之哲、實由利心。四心相仍、眞意日亡、天下滔滔、日趨於虚。

今爾節讓僞恭、自以爲賢、見形聽音、擬人以賢。心虚則禮虚。禮虚則事無不虛。虚於己則虚於人。虚於人則天下無不虛。道術之惑必亂天下。爾其知之乎。〔同前〕

虚子が賢者の要件としてあげた行爲（正學の扶、邪說の斥、救世の仁、保身の哲）が、實は矜心、勝心、權心、利心に基づくもので、この四心

がより合つて、眞と意が日々亡び天下は滔々として虚に向つてゐる——これはまた痛烈な批判である。

洪大容の實學の實質的な中身はいわゆる「六藝」であつた。禮樂射御書數からなるという六藝（周禮「大司徒の規定」は古えの君子の學であつたが、洪大容は十八世紀的な内實をもたせてこの六藝を極めて重視した。

古之教也、於其幼時已教以六藝。故及其長、上而雖未及知道、下而不失爲適用。今人之專務章句、固得其本而於其末藝不_レ合專廢。是以知道之人既未易得則誦說章句、雖或無差而日用之不可闕者却味焉不察。往往以疎脫事情爲高致、綜核庶務爲鄙俗。古之君子雖不器一才一藝而曷嘗有無能底君子乎。此所以無補於世而見笑於俗輩。是以六藝之教固當并行於灑掃之節而不容或廢也。（同、小學問疑）

事情から疎脱するを高致と爲し、庶務を綜核するを鄙俗となすことは、李朝の支配階級兩班の氣質であつたというが、洪大容はこのような學者を、世に何の助けとならず俗輩に笑われる無能な君子と呼んだ。その洪大容は文官優位の李朝で兵學の勉強をし、自宅の前に私設の天體觀測所を作つて自ら觀測し、實用に役立つ數學書も編んだほか、玄琴の名手といわれるまでに音樂にも親しんだ十八世紀六藝の學の實踐者であつた。

洪大容の實學におけるこの二面、〈虚〉に對する嚴しい批判と〈六藝〉重視が内在的にどう結びつくのか、この點をつかむために再び鄭寅普氏に登場してもらわねばならない。彼の強調した「實心」の中身がそれを解く鍵である。

三

鄭寅普氏は『大學』冒頭の三綱領「大學之道。在明明德。在親民。在止於至善。」の王陽明の解釋を示して次のように言う。

明德を明らかにすることと民衆に親しむことは一つのことだ。萬一民衆と間隔があり、民衆の利害と安危が自分の痛痒のように感通できなければ、明德の本體の何が明らかになつたのか。

〔陽明學演論「陽明學とは何か」〕

氏のいう「實心」の第一條件は、民衆の利害安危をわが事のようにいつも受けとめ、その推進と打開をはかる、民衆との一體感である。ここに實心と實學との結合の姿がある。

「實心」の第二の條件は徹底した自立の主體であることだ。實心は決してそれを欺くことのできない、人間に固有な心_〓本心とされ、それを「良知」と規定し根據づけたのは陽明學（說）であるが、そうだからといって實心は陽明學（說）を基準とし、それに従うのではない。その逆である。我々の實心_〓本心の明るさ（實心_〓本心は明らかにされなければならない）を基準にその學說の是非を吟味するのである。鄭寅普氏は大略次のように言う。

陽明の大學解は『大學』を解釋しようとしたものではない。彼は自分の本心を明らかにし、明らかにした本心に照らして『大學』を讀んだとき、格致や明親の本義がもっとも容易に解かれたのである。我々はいま陽明の學說を論じていても、陽明の學說を正しいとしてそれを民衆に訴えようというのではない。我々の本心にその學說を突き合せてみてその是非をはつきりさせようとするのだ。だが陽明の學說を判斷の基準にしないようにすることは實はたやすい。

肝心なことは我々の本心に依據して一切を照破しなければならぬこととて、これこそ不變の鐵案である。〔同前〕

我々はここに徹底した自立の精神、自立の主體をみる事ができる。

だがすべての判断基準、判断主體を自己に内在する實心におかず、すぐれた學說の側においたらどうなるか。その學說がどんなにすぐれたものであってもその前に跪拜した場合（學說、理論の物神崇拜）、實心は粗末にされ、かわつて自分のこと（名利）しかみえない、「自私念」がせりだしてくる。自私念はそのすぐれた學說を實行に移す氣はなく、自分の名利のためにその學說を利用するのみで、その學說は自私念に奉仕する飾り物に轉化してしまふ。

實心を御しやすいもの（つまらないもの）とみる心には自私念が極めて容易に入りこむ。そうなればなる程實心に對する輕視は一層甚しくなり、實心で昭察しないため他説はいつの間にか自私念の利用物に變つてしまふ。〔同、はじめに〕

すぐれた學說を自私念の餌食にしてはならない。そのためにも自分の名利しか考えない自私念に變つて、民衆の利害安危をつねに氣づかり實心を心の主體にしなければならぬ。この心は民衆の安・利をはかり、危・害を實際にとり除こうとする實踐的な心である。この心を主體としてすぐれた學說もはじめて實行に移される。ここに實心の上記二つの條件は固く結びつく。

心頭一路に眞實の地（實心）に向うとき、はじめて新しきものを受け入れて我民族の福利を圖ることができ、はじめて古いものを整頓して又我民衆の福利を圖ることができる。我民衆の福利を圖る所においてこそ我々の實心の眞相を見ることができるとを知られ。〔同

前

民衆と苦樂を共にする心 實心を主體の中核に据えるとき、はじめて自國と自己の中にある古い要素も止揚され、外國の先進文化もその新しさを確實につかみ攝取することができるというこの主張は、自己の中の古いものとの突き合せなく新しいものをどんどんとり入れる日本人のいわゆる精神的雜居性、精神的座標軸の缺如（丸山眞男『日本の思想』を克服していく手がかりになりうる、我々日本人にとつても切實な提言であるといえよう。

鄭寅普氏の實心論によつて實心實學の實心（虚に對する批判）と利用厚生（六藝の學）との結びつきがはっきりしてきた。我々が實學概念を構想するとき、鄭寅普氏の「民衆との一體」と「徹底した自立の主體」の二つのモメント（要素）を活かさねばならない。しかし實學概念を最終的に構成するとき我々は再び洪大容に戻らねばならない。

四

洪大容の陽明學評價は晩年になればなるほど高くなっていくが、その基本型は三十六歳の時すなわち北京旅行時にすでに出ていた。

余曰陽明之學儘有餘憾、但比諸後世記誦之學、豈非霄壤乎。〔湛軒書「乾淨筆談」〕

いろいろ遺憾に思うところはあがるが、記誦の學と比べれば天地の開きがあるというものである。いま陽明學への批判點が肝心なところだ。洪大容は次のように言う。

今陽明之意若曰惟求明於目、目既明則天下之色不難見也、惟求聰於耳、耳既聰則天下之聲不難聽也、惟求辨於口、口既辨則天下之味不難嘗也、此其用功雖若簡切、責效雖若巧速、惟捨其色而求明於目、

五色之變不可勝見也、捨其聲而求聰於耳、五聲之變不可勝聽也、捨其味而求辨於口、五味之變不可勝嘗也。是以目雖有見而常人之明不如離婁、耳雖有聽而常人之聰不如師曠、口雖有嘗而常人之辨不如易牙。是乃先覺之所獨得而窮理之所以貴也。〔同 杭傳尺牘 與篠飲書〕

陽明が主體心を強調する餘り、具體的に多くのものを見て（聽いて、味わって）自分の目（耳、口）をみがいていくことをせず、ただ主觀的に自分の目（耳、口）を重んじたとしても、天下の多くの色（聲、味）をみわけることはできないであろう、離婁や師曠や易牙がそれぞれ視力、聴力、味覺力で常人に勝るのは彼らが多くの色、聲、味に接し、各自の目、耳、口をきたえたからである。これら先覺者の自得と窮理の貴い所以である、と。洪大容はここで物について理を窮める、朱子學の實證的窮理の貴さを確認している。この點では彼は陽明學徒ではない。

ところが晩年（40代後半）になると逆に朱子學一尊の體制、その獨尊獨善的な異學・異端排除に激しい嫌惡の情が表明されてくる。

若必開門授徒、排闥異己、陰逞勝心、傲然有惟獨存之意者、近世道學矩度、誠甚可厭。〔前出、133頁〕

それと共に老莊、禪學、陸王學など朱子學によって異學・異端とされてきた諸學は「好尚」のちがいで彼の中で市民権を與えられらる。

異學雖多端、其澄心救世、要歸於修己治人則一也。在我則從吾所好、在彼則與其爲善、顧何傷乎。難齊者物而心爲甚、人各有好尚、孰能一之。然則各修其善、各效其能、要以祛私而善俗則何害於大同乎。世儒有志於學者必關異端爲入道之權輿、某於此積蘊排憤、效以奉質于大方、乞賜條破。〔同、同、與孫葵洲書〕

今まで異學・異端とされ排斥されてきた總ての諸學に各存在意義をみとめる、プラグマティックともいえるがこの開かれた學問的態度は貴重であり注目に値する。これこそ諸學に向って開かれる實學の立場にふさわしい。洪大容が實際にこれら諸學のうちどれを、そして何を自己の思想にいかしていたかといえ、それは彼の晩年の作と思われ『鑿山問答』の主人公―實翁の思想的立場に集約されているといつてよいであろう。たとえ正しい認識でも自分の目でたしかめることを何よりも重視した實證的態度は朱子學の格物窮理のそれを引いていて、これが實翁のバックボーンであるが、これを除いて彼を構成する他のモメントをあげれば、一つは宇宙無限にまで擴がるスケールの大きさと人間中心の物の見方から脱却して總てを相對視する態度および名利からの超脱。他の一つは虚偽虚飾を憎み、記誦や詞章の學に止まる非實際性を糾弾する實心實學の立場。前者は老莊から、後者は陸王からそれぞれ引きだし活かしたものである。洪大容は實翁において朱子學、老莊學、陸王學の三者がそれぞれ本領を發揮し相互に貢獻して一つの實學という體系をつくりあげている見事な例をみよ。ここには事實をふまえた確かな實證性、人間の學派的バイアスにとらわれないスケール大きく開かれた視點、實行の伴わない學問の虚偽腐敗を憎む熱き心の三者の結合・結晶がある。洪大容の實學概念ひいては十八世紀の實學概念はこのように朱子學と老莊學と陽明學の各最良の要素の結合・結晶であり、これらの最良の要素が結合したときに實學はそのもつとも生きた姿を示したといふことができよう。

だが我々は實學の歴史的概念、十八世紀の實學概念の把握に止まっていることはできない。今日に生きる實學概念をそこから引き出さなければならぬ。

實學は實事求是なわちつねに實際に當つてそこにある關係性Ⅱ法則性を困難ではあつてもみきわめていく實證的な窮理の學である。

實學は特定の理論を物神崇拜し、他の理論や立場を否定又は無視する一尊的立場ではなく、廣く諸學に向つて開かれそれを位置づけられるスケール大きい百科の學である。

實學はつねに實心から出發し、實事、實地をふまえる、民衆と一體となつた學問、何よりも實行をその生命とする學問である。

これらの今日の實學概念を構成する諸モメントのうち、私はとりわけ第三番目のそれを重視したいと思うのである。それは歴史的にいえば實學の陽明學的要素、鄭寅普氏のいう「實心」的要素である。それは總てを商品化(去勢)せずにはやまない現代日本の學問状況の中で、その例外でない自分の學問的營みを大膽に改造していくために必要なのである。今日一番缺けているものは學問の民衆的立場での實行性である。

- 註(1) 侯外廬『中國早期啓蒙思想史』、文一平「實事求是派の學風」(『李朝文化史別頁』第一章)、鄭寅普「陽明學演論」このうち侯外廬のは成書は一九四〇年代に屬するが、一九三〇年代に構想されたものと解した。
- (2) 學生社刊、一九七六年
- (3) 「磻溪柳攀遠研究」(『歴史學報』一九五二(三)の結論部分)
- (4) 崔書勉「爲堂 鄭寅普先生の逝去をきいて」『韓』第三十六號、一九七四年十二月
- (5) 『檀園國學散藁』一四六頁、『陽明學演論(外)』(三星文化文庫)十一頁
- (6) 「朝鮮には陽明學派がなかつた。陽明學は異端、邪説のように追われ、その本が机上にあるのを發見されただけで亂賊の聲討をよびおこしたの

- で、一二の學者がたとえ陽明の學説にひとしれず共鳴したとしても外部には表わすことができなかった。それ故陽明學派がなかつたということは事實といわざるをえない。朝鮮は晦菴學派だけだ。幾百年間誰かれを問わずその學を受け入れてこそ進身、取名の道を得ることができたので、全部が全部そうであつたから別に晦菴學派という名もなかつた程だ。しかし學問が名塗となると、假の弊が生じやすくなり、この學問(陽明學—引用者)が名塗どころか世を擧げて排斥の標的になつたにも拘らず、私の心に正しいから私はこれを獨修するといふのであれば、これこそは眞無假の原血脈であるから、存在しなかつたといふ陽明學派は實際には一番貴重な存在でなかつたかどうか誰が知らう。今陽明學派として外に表わすことのできなかつた先人たちを尋ねてみると、本當に寥々たるものであるが、その中に大略三つの區分ができる。…第三類の陽明學派として洪湛軒大容(英祖七年辛亥生、正祖七年癸卯卒)をみるべきで云々」(『陽明學演論』第六章朝鮮陽明學派)
- (7) 拙稿「洪大容の宇宙無限論—東京女子大學比較文化研究所紀要第三十八卷、一九七七年一月
- (8) 拙稿「地轉(動)説から宇宙無限論へ—金錫文と洪大容の世界—」東京女子大學『論集』第三十卷(二號)一九八〇年三月
- (9) 「夫地塊旋轉一日一周。地周九萬里。一日十二時。以九萬之濶遶十二之限。其行之疾亟於震電。急於炮丸。」
- (10) 拙稿「慕華と自尊の間—十八世紀朝鮮知識人の中國觀—」『紀要比較文化研究』第十九輯 一九八一年三月 東京大學教養學部
- (11) このような態度をきりひらいた先驅者に張維(一五八七—一六三八)がいる。洪大容はその著『谿谷漫筆』を讀んでいた形跡がある。姜在彦『朝鮮の開化思想』三十頁參照